

「彦火々出見尊絵巻」図像私註(五)

—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—

古 田 雅 憲

The Visual Thinking Strategies for “The Emaki
of UMISACHI & YAMASACHI”(5)

Masanori Furuta

【はじめに】

幼児・低学年児童の古典学習のために、明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を「読み聞かせ」学習材として再構成する—その目論見は旧稿（後掲・参考文献10～13）のままに、今回は巻五部分を取りあげる。

その趣意は旧稿で詳しく述べたとおり、小学校学習指導要領に言う「伝統的な言語文化に関する事項」にかかる実践的なプログラムを開発することにある。それに際して特に意を注いだのは、「伝え合う力を高める」という国語科の大目標に従う古典教室として、児童相互の「交流」を活性化する学習活動となるように、という点である。

具体的には、「海幸彦・山幸彦」の神話に題材を得た古典絵画として質・量ともに秀でた明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を取り上げ、まず古典絵画をよく「見る」ことを通じて、児童相互の「話す・聞く活動/交流」を活性化しようとする。次に、発達段階に応じてリライトした本文によって「内容の大体を知り」、その上で「音読すること」を楽しんだり、「国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方」について話題にしようとするのである。

ともあれ、そのようなことについては旧稿冒頭に縷々述べたことでもあり、今ここに繰り返さない。必要に応じて参照されたい。以下、さっそく巻五・各

場面について図像私註を示し、併せて詞書を踏まえた読み解きを提案したい。

【第二十一場面（図版①）／巻五・第二紙の読み解き】

巻頭詞書（第一紙）に続いて第二十一場面となる。前場面（巻四末）と同じく、兄尊の住居が舞台である。そこは簀子縁を備えた板敷間で、室内奥には畳も敷いてある。霞の間から板葺屋根が垣間見える。右方には土坡がなだらかに続き、松や桜などがこんもりと繁る。左方には泉水が設えられ、それに配された小岩のもとには桜が美しく花を咲かせている。それらの樹木等が「フレーム」としてこの一場面を浮かび上がらせている。



<図版①；参考文献(5)による。以下同。>

ちなみに、前場面と同じ一室ではあるが、泉水の位置からすればアングルを異にする（巻一冒頭・同場面とは同じである）。



場面中央、二人の男性が対峙している。右方が兄尊，左方が弟宮である。

左方・弟宮は花唐草紋の狩衣に，桜花紋を散らした指貫袴を着している。前場面と同じである。

が、弟宮はここでは激しく身を翻して、袴の裾は大きく乱れ、また袖もたくし上げられて二の腕も露わである。左手を額に翳し、右手には珠を貫いた紐を固く握っている。画中詞には「しほみつたまをふるところ」と言う。釣針を兄尊に返し終えて、懸案も無事解決したやに見えた前場面から一転、画面は緊迫感に包まれている。弟宮は、その心中に「ついてに、なさけなくせめしこと、すこしおもひらせんと（巻四・巻末詞書）」報復の意志を密かに抱いていたのである。

そして、ついに彼は行動に出た——龍王のかねてからの教え通り、「しほみちのたまをみつにひたして、『しほみちてこ』といひてふ」った（巻四・巻末詞書）ところ、「龍王のいひしかことく、しほみちのたまをみつにひたしてふれは、みついて」た（巻五・巻頭詞書）のである。

画面右方に渦流線で描き込まれた一塊がその水柱である。そのなかに爪先立って兄尊はまさしく「お手上げ」の体である。烏帽子が脱げ落ちてしまった様は、人前での露頭を恥じるのが「常識」であった往時にあっては、面目もすっかり失ってしまったという含意であろう。巻五・巻頭詞書に「みついて、このかみのくひまたたひのほる。てとひをして、かうをこふことかきりなし。」と言うところとよく照応している。

弟宮は額に手を翳して、その兄尊の様子を見つめている。「額に手を翳す」仕草は、火事や喧嘩の鬨擾を見守る人物の様として古絵巻等によく見出されるものである。およそ、自ら発揮した力の強大さと兄尊の窮状とを固唾を呑んで見つめているといった体であろう。



以上のような画註と詞書等を踏まえて、次のように再構成してみた。

つりばりを かえしてもらったのに うみさちびこは まだ おこっています。

やまさちびこは ちょっと こらしめてやろうと おもいました。

そこで りゅうおうさまから もらった ふしぎな たまを つかって みることに しました。

じつは やまさちびこが りゅうぐうじょうを しゅっぱつするとき
りゅうおうさまは ふたつの たまを くれたのでした。

ひとつは <しおみちのたま>と いました。それを ふると みず
がたぐさん でてくるという ふしぎが おこります。もう ひとつのた
まは <しおひのたま>と いました。こちらは みずを けしてしま
います。

やまさちびこが <しおみちのたま>を ふると あっと いう まに
みずが できました。

うみさちびこは みずに のみこまれ、 てあしを ばたつかせながら
さげびました。

「まいった、まいった。こうさん、こうさん。」

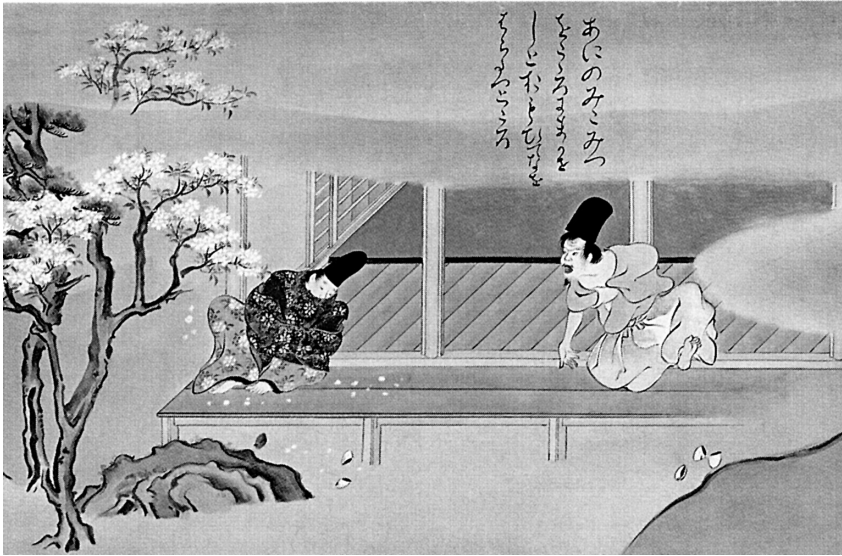
【第二十二場面（図版②）／巻五・第三紙の読み解き】

次いで第二十二場面となる。前場面と同じ一室が舞台である。その右端左端に描かれた土坡や松樹・桜樹が「フレーム」となって一場面を浮かび上がらせている。ちなみに、前場面に描かれていた泉水がここではなぜか見られない。同じ一室を舞台とする後続の三場面ではまた描かれるから、あるいは画者がここだけうっかり失念したということもあるのかしれない。



簀子縁上に兄弟が対峙している。前場面で兄尊を溺れさせた水柱は消えている。兄尊が降参と言うので弟宮はいったん水を引かせたのである。

これらの点、巻頭詞書に「龍王のいひしかことく、しほみちのたまをみつにひたしてふれは、みついて、このかみのくひまてたたひのほる。てとひをして、かうをこふことかきりなし。おとゝのみこは、しおひのたまをもた（欠字）みつかたふきて、よりこす。このかみ（欠字）おほゝれてまとへは、しほひのたまをみつにひたしてふれは、すゆにみつひぬ。」と言うのに照応する。



<図版②>

右方・兄尊はバランスを失って片膝立ちになり、右手左足を宙に迷わせている。思わず左手でおのが右袖を掴んだらしい。結髪は水に濡れて乱れ、烏帽子も前後逆に被るほどに人目憚らず狼狽している体である。額に幾本も皺を寄せて大いに腹も立てているらしい。兄尊の様子を描く画者の筆は、細部にまで工夫が凝らされていて実に面白い。

このあたり、画中詞に「あにのみこ、みつをこゝろにまかせしとおもひて、なをはらたつところ」と言い、また巻頭詞書には「このかのみこのおもふやう、このみこはいかにしてみつを(欠字)たいにすへきそ。こは、ふいの(欠字)とおもひて(欠字)いかりて、おとゝをのる。」と言うところに照応している。

左方・弟宮は簀子縁の端にいて、上半身は兄尊の方へ向けつつも、下半身は逆向きに振る風にうずくまっている。胸元で組まれた両手は袖内に包まれて見えず、また口元も襟に隠されて見えない。伏し目がちに俯く彼が今どのような心境にいるのか、読者はおおよそ読み取ることができない。その分、かえって不気味でさえある。兄尊の描出に用いられた過剰なまでの筆捌きとは対照的で面

白い。



以上のような画註と詞書等を踏まえて、次のように再構成してみた。

やまさちびこは こんどは <しおひのたま>を ふりました。あつという まに みずは どこかに きえてしまいました。

うみさちびこは いちどは こうさんしたくせに やっぱり くやしくなつて やまさちびこに むかつて わるくちを いいました。

「よくも やつたな!

みずを だしたり けしたり いったい どういう つもりだい!」

やまさちびこは えんがわの すみに すわつて だまつて きいています。

■えをよくみてみよう■

うみさちびこが びしょぬれに なつている ようすが わかりますか。やまさちびこは わらつているのかしら?

【第二十三場面（図版③）／巻五・第四紙右半の読み解き】

次いで第二十三場面となる。ここもまた前場面と同じ一室が舞台である。その右端左端に描かれた土坡や松樹・桜樹や泉水等が「フレーム」となつて一場面を浮かび上がらせている。

兄弟は、前場面までとは違い、簀子縁から前庭に下りて対峙している。

左方・弟宮は足を交互に踏み出して、あたかも踊つているかのごとくである。左手をしっかりと開いては肩肘を張り、右手では潮満珠を頭上に翳して振り回している。ちなみに「掌を強く開く・肩肘を張る」仕草は、喧嘩等の争いに関わつている当人の様として古絵巻等によく見出されるものである。一度では懲りずに悪態を吐く兄尊に対して、弟宮は再びはつきりと攻めかかつてゐるということだろう。このあたり、巻頭詞書に「おとゝ、さは、け（欠字）かせぬみ

つかといひて、また、しおみちのたまをはしめのことくふる。」と言うところに照応している。



<図版③>

さて右方には第二十一場面よりもずっと大きな水塊が描かれている。両手両足をばたつかせながら、兄尊は顔ばかりを水中からわずかに出して息も絶え絶えという風である。このあたり、巻頭詞書に「はしめは、くひもとにありつるを、このたひはめ（欠字）もとにたゝるのほるにたれは、ふたつてをさゝけて、おもてのみつをはらひて、おほゝれまとふことかきりなし。」と言うところに照応している。画中詞には「かうこうところ」と言う。



以上のような画註と詞書等を踏まえて、次のように再構成してみた。

やまさちびこは もういちど <しおみちのたま>を ふりました。
さっきよりも たくさんの みずが できました。

とうとう うみさちびこは いきも たえだえになって こうさん しました。

■えをよくみてみよう■

ふたりの しぐさを まねしてごらんさい。

—うみさちびこは どんなことを いってそうですか？

—やまさちびこは どんなことを いってそうですか？

【第二十四場面（図版④）／巻五・第四紙左半～第五紙右半の読み解き】

次いで第二十四場面となる。ここもまた前場面と同じ一室が舞台である。その右端左端に描かれた土坡や松樹・桜樹や泉水等が「フレーム」となって一場面を浮かび上がらせている。



<図版④>

兄弟は前場面に引き続き前庭で対峙している。

左方・弟宮は、前場面での激しい動きから一転、穏やかに立ちながら、右手に握った珠を頭上に翳して振っている。画中詞に「しほひのたまをふるところ」と言うところである。

その潮干珠の霊力も明らかに、先ほどまで兄尊の口鼻を覆っていた大水塊は、今や膝あたりまで鎮まりつつある。兄尊はその中に立ちつくすばかりである。その上着はだらしなく両肌脱ぎのままに、落ちた烏帽子を拾って体面を取り繕うことも忘れ、ただ両手をだらりと前に垂らして茫然自失の体である。兄弟の力関係はすっかり逆転してしまった。



このあたりの展開は繰り返しが多く、もちろん「繰り返し」じたいが面白いのであるが、子どものための読み聞かせとして話を急ぐ必要があれば、この場面は省いてよいのかもしれない。

【第二十五場面 (図版⑤) / 巻五・第五紙左半の読み解き】

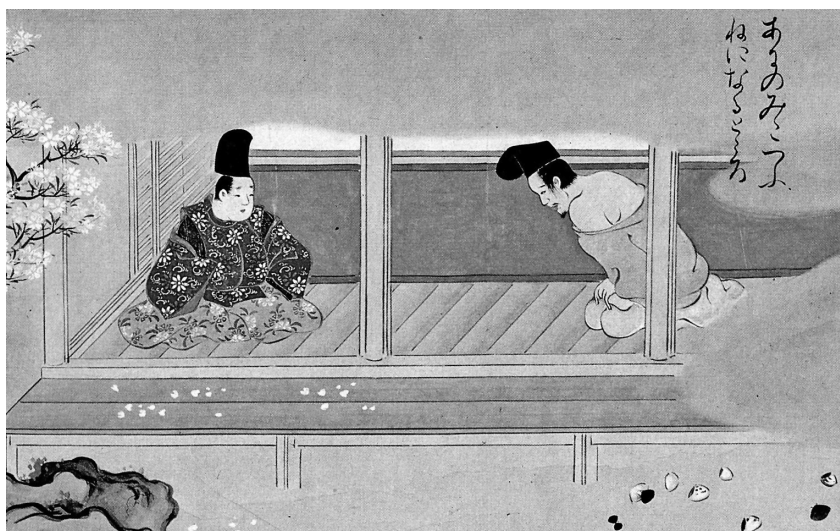
次いで第二十五場面となる。ここもまた前場面と同じ一室が舞台である。その右端左端に描かれた土坡や松樹・桜樹や泉水等が「フレーム」となって一場面を浮かび上がらせている。

兄弟は再び板敷間に戻って対面している。

左方・弟宮は、かつて兄がそうしていたように、ゆったりと胡座をかいて座る。彼が兄の住居で胡座をかくのは、実はこれが初めてである。何でもない所作ではあるが、画者の筆は、こういう微妙な描写の裡にも力関係の逆転を暗示している。

右方・兄尊は膝を揃えて従者同然に跪いている。両肌脱ぎに着崩したままの着物も彼の失意をよく表している。そして何よりも、その烏帽子が水に傷んで「萎え烏帽子」同然になってしまったことは、兄弟の力関係の逆転を象徴的に表しているだろう。

この場面、画中詞に「あにのみこと、つふねになるところ」と言い、また巻頭詞書に「そのときに、このかみちかひていはく、われ、おろかなるこゝろを



<図版⑤>

もちて、みこのためにむらいをしたり。いま、みつのためにおほ、れてしなん。たすけたまへ。しからは、わかこ、むまこつき、に、つきひののめくらむかきりは、きみの（欠字）むつふねとなりて、みつきものをそな（欠字）みとならむとちかふ」と言うのとよく照応している。



以上のような画註と詞書等を踏まえて、次のように再構成してみた。

やまさちびこは うみさちびこを ゆるしてあげることに しました。

うみさちびこは すっかり つかれた ようすで こう いいました。

「はりの こと これまで きつく いってばかりだったね。ゆるしておくれ。これから さきは あにだからといって けっして いばらないように いたします。」

うみさちびこの ことばを しんじて、やまさちびこは りゅうぐう じょうに もどることに しました。

【第二十六場面 (図版⑥) / 巻五・第六紙の読み解き】

次いで第二十六場面となる。兄尊の住居の裏庭が舞台である。

場面左端 (第六紙中葉) には垣と折戸がある。垣には網も干してある。巻三・第三紙と同様の景色であるが、先に見られたさまざまな海幸はここには見られない。ただ艚が転がっているばかりで、なにやらもの寂しくもある。

左方・弟宮は股立ちを執って足下の水を避けつつ、今しも折戸から出て行くようにしている。懸案の釣針を返し、また一通りの報復も遂げて思い残すこともないという体であろうか。右方・兄尊の方を振り返って眺めやっている。巻頭詞書に「おと、(欠字) うしなひて、おと、のみこは龍宮にかへりたまひぬ。」と言うところに照応している。

その兄尊は、しどけなく着崩れてしまった服を着替えることもなく、また、水に傷んで折れ曲がってしまった烏帽子を代えることも忘れてしているらしい。すっかり卑屈な様子で腰を屈め手を摺って、弟宮を見送っている。泉水のもとに素足で立っている。今や彼は、足が汚れることさえも気にしない境涯にある



< 図版⑥ >

らしい。画中詞には「おと、のみことをうやまひて、にはにおりておるところ」と言う。



このあたりの展開は繰り返しが多く、もちろん「繰り返し」じたいが面白いのであるが、子どものための読み聞かせとして話を急ぐ必要があれば、この場面は省いてよいのかもしれない。

【第二十七場面（図版なし）／巻五・第六紙左半～第十紙の読み解き】

次いで第二十七場面となる。この場面は、再び海宮へ向かう弟宮の舟（第七紙左半～八紙右半）を中心に、その前後に海宮軍の行列を配した図像である。その左右両端（第六左半～七紙右半と第十紙）に、兄尊邸裏の入江（出発点）と海宮の大門（終着点）が対をなす。

激しく波も逆巻く大海の中、総勢十名の海宮軍が行列してゆく。ある者は徒歩で、ある者は霊獣の背にまたがって進み行く。海宮高官と思しき正装の者、海の異形と思しき裸者、はたまた人身魚頭の怪物までが列に加わっている。おのおの、弓矢に旗矛、熊手に引提など、思い思いの道具を手にして弟宮の帰還に扈従する。画中詞に「はりかへしてかへるところ」と言う。

彼らの目指す先に海宮の大門が見えてくる（第十紙）。大門上部は霞に紛れて見えないが、色とりどりの玉石を畳んで荘厳した基壇と、その上に朱塗りの部材で組み上げた大門下部とが垣間見える。瓦葺き築垣の漆喰の白さも、周囲の松樹の緑に照り映えて美しい。

基壇下に進み出た高官は額に手を翳して、海宮軍の進軍を固唾を吞んで待ち受けている。もう一人の高官は振り返りつつ階を駆け上る様子である。奥にいて今や遅しと待つ海龍王に奏しに上がる体らしい。



巻頭詞書にこの行列の有様は一言も触れられない。画者は、物語の文脈・行間から察してこの行列図を描出して見せたわけである。延々三紙半を費やして繰り返し描かれた波濤のうねり、その間に見え隠れする海宮軍の荒ぶる面々。巻四に続いて再び「異形行列」を描く筆の冴えは、画者の心に宿る、「海」と

いう異界への畏怖と憧憬とを確かに暗示するだろう。

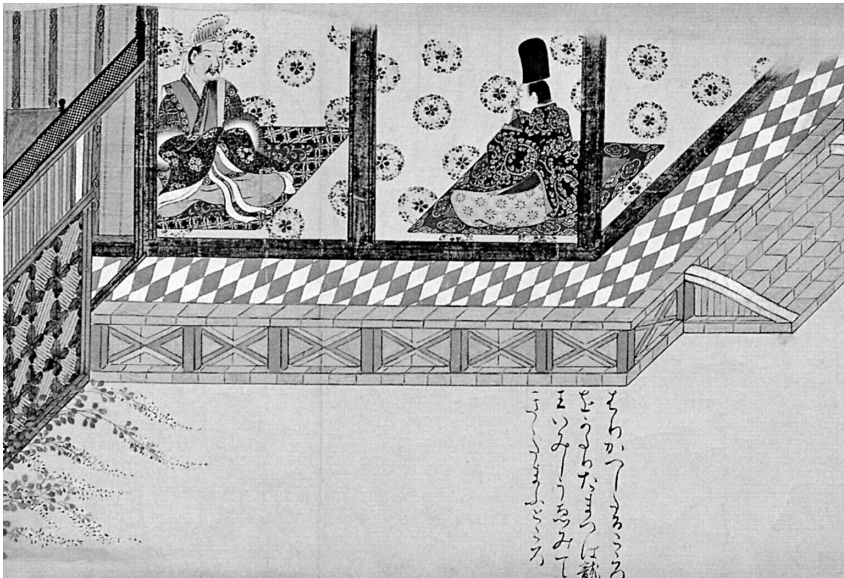
ただし、詞書には触れられない場面であることから知られるように、この行列図じたい物語の進展に不可欠というものではない。幼児・児童の実態に応じては「読み聞かせ古典絵本」の一頁から省いてよいのかもしれない。

【第二十八場面 (図版⑦⑧) / 巻五・第十一紙～第十二紙の読み解き】

次いで第二十八場面となる。その右半に海宮主殿と思しき一室，そこから屈曲する廊下を経て場面左半・姫の部屋へと続く長い一画面である。

まず第一シーンは海宮主殿と思しき一室が舞台である (図版⑦・部分拡大図)。その造作は、緑・白・黄など色とりどりの玉石で表面や側面を荘厳した基壇の上に、丹塗りの部材で柱・長押を組み上げたものである。室内の床一面には花紋の氈が敷き詰められている。

室内では二人の男性が対面する。右方・弟宮は前場面と同じ衣装を美しく身にまとい、藍色に縁取りした朱の褥に座っている。左方・海龍王も美しく着飾り、朱色に縁取りした藍の褥に座っている。冠を着け笏も持しているから、儀



< 図版⑦ >

礼に則った対面に、王者の品格を以て臨んでいるらしい。とは言え、海龍王の表情はたいそう柔和で嬉しげな様子である。画中詞に「はりかへしたるころをかたりたまへは、龍王いみしうえみてきゝたまふところ」と言うところによく照応している。

一方、階下の庭には三人が跪いている。弟宮の行列に扈從してきた者どもである。前列に弓を取る武将は魚形の兜を被り、身には美しい緑衣をまとっている。立派な靴沓や豹皮の肩掛けも洒落ている。その後ろには短袖・腰切の帷子姿の二人が控えている。それぞれ矛を持ったり刀を腰に帯びたりしているから、帰して休む間もなく参上したという体である。彼らの頭上には、松の緑と鶯の紅葉とが照り映えてとても美しい。



以上のような画註と詞書等を踏まえて、次のように再構成してみた。

りゅうぐうじょうに もどった やまさちびこは りゅうおうさまとおはなしを しています。

「かして いただいた たまを つかって、みごと、うみさちひこを
こらしめました。」

「それは それは よく やった。さすが わが むこのじゃ。」

りゅうおうさまは とても ゆかいそうに ほほえんでいます。



次いで第二シーンである。屈曲した廊下と網代垣の奥、姫の部屋と思しき一室が舞台となる（図版⑧・部分拡大図）。朱塗りの部材で組んだ柱・長押越しに、美しく磨き上げた板敷の広間が見える。

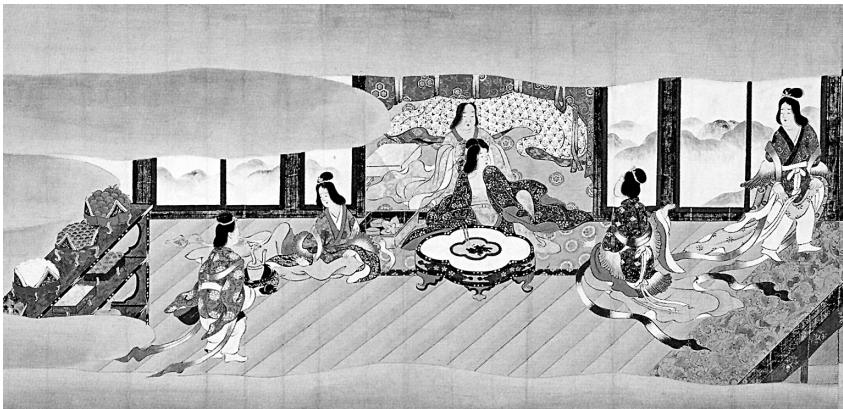
火桶の前に座っているのが姫君である。几帳を立てた背後の小部屋は寝所と思しい。その几帳の足下に脱ぎ捨てられた大袷は先ほどまで着掛けていたものか。山水の障子も開け放たれたまま、どうやら慌てて起き抜けたという体らしい。

彼女の衣装はいまだ整わない。はだけた胸元がうそ寒いのか、火桶には赤々

と火が熾してある。何はともあれと、寝乱れた髪を結び直させている体らしい。

背後に膝立ちした女官は、右手で櫛を用いつつ、左手ではねた髪を撫でつけている。彼女の膝元に置かれた櫛篋には八稜鏡やさまざまな化粧小箱も見える。両人の右手側に居て、「早く早く」とばかりに手招きする女官の先には、角盥に烏頭の水瓶を入れて運んでくる別の女官がいる。結髪に用いる水を運んでいるのである。彼女の領巾は後ろに大きく靡いていて、いかにも大急ぎという体である。

シーン右方では、室外廊下から青簾を透かして女官二人が何やら話しかけている体である。海龍王に近侍する女官から告げられた「弟宮の帰還」を啓上しているらしい。室内では側仕えの女官たちが取り次いでいるのだろう。姫のお側に上がった女官が、主殿の方を指差しながら最新情報などお耳に入れている風である。回廊からは、慌てふためいて走る女童の足音が聞こえてきそうである。



<図版⑧>

女官たちはいずれも髪上げして釵子を飾り、色とりどりに鮮やかな領巾裙帯の唐朝服を着している。また室内の設えも、美しく装飾した猫足の火桶や、果物・菓子を山と盛った色とりどりの折敷など、実に見事である。画者は筆を尽くして海宮の豊かさを描き出す。

ただし、とても美しい一場面ではあるが、物語の進展に不可欠というもので

はない。幼児・児童の実態に応じては「読み聞かせ古典絵本」の一頁から省いてよいのかもしれない。

※以下、次稿に続く。

参考文献

- (1) 稲本万里子 (2003) 「描かれた出産—『彦火々出見尊絵巻』の制作意図を読み解く」(服藤早苗, 小嶋菜温子 (編) 『生育儀礼の歴史と文化—子どもとジェンダー』 森話社)
- (2) 稲本万里子 (2007) 「描かれた結婚—源氏物語絵巻 彦火々出見尊絵巻を中心に」(小嶋菜温子 (編) 『平安文学と隣接諸学 3 王朝文学と通過儀礼』 竹林舎)
- (3) 大林三千代 (1975) 「『すみよしえんき』における彦火々出見尊の説話について」(『国文研究』4)
- (4) 小松茂美 (1979) 『日本絵巻大成 (22) 彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (5) 小松茂美 (1992) 『続日本の絵巻 (19) 彦火々出見尊絵巻 浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (6) 高畑勲 (1999) 『十二世紀のアニメーション—国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの—』(徳間書店)
- (7) 永井久美子 (2001) 「弟の王権—『彦火々出見尊絵巻』制作背景論おぼえがき」(『比較文学・文化論集』18)
- (8) 中根千絵 (2004) 「院政期文学に現れる老賢者」(『アジア遊学』68)
- (9) 西本鶏介 (2004) 『海幸彦山幸彦日本の物語絵本』(ポプラ社, 藤川秀之絵)
- (10) 古田雅憲 (2009) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註 (一) —幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」(『西南学院大学人間科学論集』5巻1号)
- (11) 古田雅憲 (2010) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註 (二) —幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」(『西南学院大学人間科学論集』5巻2号)
- (12) 古田雅憲 (2010) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註 (三) —幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」(『西南学院大学人間科学論集』6巻1号)
- (13) 古田雅憲 (2011) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註 (四) —幼児・低学年児童の古典

学習材として再構成するために―」（「西南学院大学人間科学論集」6巻2号）

(14) 山内英男（1974）『彦火々出見尊絵』研究序説」（「東洋大学大学院紀要」10）

※本稿では『彦火々出見尊絵巻』の図像理解に直結するものだけに限った。論旨全体に関するものは前稿（参考文献10）に掲げたので参照されたい。

西南学院大学人間科学部児童教育学科